



Data

監督: ロマン・ポランスキー
 原作: デルフィーヌ・ド・ヴィガン
 『デルフィーヌの友情』(水声社刊)
 出演: エマニュエル・セニエ/エヴァ・グリーン/ヴァンサン・ペレーズ/ドミニク・ピノン/ジョゼ・ダヤン/ブリジット・ルアン/ノエミ・ルポフスキー

👁️👁️ みどころ

ポーランドの巨匠、ロマン・ポランスキー監督作品は私の評価が高く星5つが多いが、85歳にして挑戦した“サスペンスもの”の本作も星5つ!

同年代の山田洋次監督が『家族はつらいよ』シリーズで、お手軽なホームドラマ路線に走っていることと対比すれば、女流作家と、彼女を“操縦”“支配”し、さらには“監禁”“サスペンス”に至る謎のゴーストライターの女・エルとの心理戦を描く本作は、実にスリリング。

常に新しいネタを探さなければならない作家業はつらいもの。私小説でヒット作を飛ばす作家は、とりわけそうだ。しかして、華やかなサイン会やパーティの後、スランプに陥った女流作家が、エルとの波乱万丈の共同生活を経た後に発表した、新たな告白小説とその結末は?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 85歳にして見事な“サスペンスもの”を! ■□■

86歳になった山田洋次監督は今、『妻よ薔薇のように 家族はつらいよⅢ』(18年)のような、楽しいけれども、ある意味お気軽な映画作りに専念している(?)が、ロマン・ポランスキー監督は85歳にしてなお本作のような見事な“サスペンスもの”に挑戦!彼の直近作は80歳の時に監督した『毛皮のヴィーナス』(13年)。これは“マゾ”をテーマにした面白い二人芝居で、私の採点は星5つだった(『シネマ35』226頁)。その前の、『戦場のピアニスト』(02年)(『シネマ2』64頁)も、『オリバー・ツイスト』(05年)(『シネマ9』273頁)も、『おとなのけんか』(11年)(『シネマ28』136頁)も見事だったが、私が強く印象に残っているのは『ゴーストライター』(10年)(『シネマ27』143頁)だ。

執筆業をしているとゴーストライターという職業によく出会うが、その仕事はあくまで影に隠れて表に出ない仕事。ところが同作では、真実を書くためには調査が大切！と張り切り、素人探偵に走るゴーストライターのために、ハラハラドキドキの緊張感が生まれ、CIAの暗躍ぶりも顕著になっていった。それに対して本作では自称ゴーストライターで、エルと名乗る女（エヴァ・グリーン）が、本作の主演であるホンモノの女流作家デルフィーヌ（エマニュエル・セニエ）を喰うような強烈な能力と個性、そして存在感を見せつけてくれるので、それに注目！

『毛皮のヴィーナス』では、毛皮と鞭そしてハイヒールとブーツという、いかにも“女ご主人様”好みの、マゾ文学に不可欠な小道具がストーリーの進行に役立っていたが、本作の小道具はスマホ全盛時代にもかかわらず、デルフィーヌが愛用している4冊の手帳。1冊1冊にその用途が決められた手帳はデルフィーヌの作品を生み出す創作ノートだが、それがゴーストライターであるエルの手へ渡ると・・・。

■□■サイン会は退屈でお疲れ？いやいや、人との出会いが！■□■

人気作家にとって、本を売るためのサイン会は本を出してくれた出版社に対する一種の義務だから、その義務は果たすべきもの。本作冒頭は、そんな思いで読者たちが差し出す自著に次々とサインし、愛想よく接していたものの、極度の疲れから「中止！」のサインを出すデルフィーヌの姿が映し出される。その後はパーティへの出席（義務）もあるらしいから、人気作家は大変だ。しかし、ファンの列が解消した後に、厚かましく「誰も見ていないから、私の本だけにサインして」と言い寄ってきたのが、どこか不思議な魅力を持った美女。いつものデルフィーヌなら、そんな秩序乱しのファンにサービスするはずはないのだが、そこではエルと名乗るこの美女のペースに乗せられたかのようにサインに応じた上、パーティの席でも顔を合わせると席を外して2人だけでしばし楽しい会話を・・・。さらに、部屋に戻ると電話が入ったが、そんな例外もあえて容認した上、翌日の朝食も喫茶店でちょっとした会話を交わしながら2人で済ませることに。

人との出会いは不思議なもので、いろんなきっかけから生まれるが、まさか人気作家と一ファンの女性が、サイン会での出会いから親しくなるなんて！こりゃ、すごい偶然。一見そう思えなくもないが、ロマン・ポランスキー監督のこと、この導入部のシークエンスを見れば、これが偶然ではなく、エルが仕組んだ展開であることは明らかだ。なのに、なぜデルフィーヌはそれに気付かず、こんなに安易にエルを受け入れ、エルに対して心を開いたの・・・？

■□■なぜここまで親密に！その原因はスランプにあり？■□■

偶然現れた魅力的な女に男が引き込まれ、次第にのっぴきならない状況に追い込まれていくパターンの映画は多い。その典型の1つがマイケル・ダグラスとシャロン・ストーン

が共演した『氷の微笑』（92年）で、その手の女はファム・ファタールと呼ばれている。しかし、突如現れた魅力的な女エルに、人気作家デルフィーヌが引き込まれ、デルフィーヌの部屋での同居、デルフィーヌのパソコンを使ってのメールのやりとり等、デルフィーヌの秘書的業務までエルがこなすようになったのは、一体なぜ？近時は男女間の愛だけでなく女同士の愛もほぼ公認だから、デルフィーヌとエルの間にそんな感情があればそれもあるが、この2人之间にはそれはないようだから、なおさらデルフィーヌがエルに対してここまで心を開き、無防備になっていく前半のストーリー展開は少し不思議だ。しかし、その原因は？

近時の、何でも解説調の邦画と違って、ポランスキー監督作品はそこまで解説してくれない。しかし、いつものようにパソコンに向かって執筆に入ろうとするとピタリと指が止まってしまうシーンを2回も見せつけられると、デルフィーヌの作家としてのスランプぶりがよくわかる。また、ベストセラーになったデルフィーヌの小説は、心を病んで自殺した母親との生活を綴った私小説だったから、それに批判的な読者がいたのは仕方ない。そんな心ないファンからの誹謗、中傷はある意味で人気作家の1つの勳章だが、そんな非難の手紙が連日送られてくる中、さすがにデルフィーヌは少し参っていたらしい。出版社はそんなデルフィーヌの悩みにおかまいなく、サイン会だ、パーティだ、次作の企画だ、とあくまで“商売ペース”。そんな状況下、デルフィーヌの熱烈なファンだというだけでなく、聡明で話題が豊富、しかも、秘書的業務までこなせる有能なパートナーが同じ部屋にいると大いに安心。デルフィーヌがそう思ったのは当然だが、その原因はデルフィーヌのスランプにあり・・・？

籍こそ入れていないもののデルフィーヌの事実上のパートナーであるフランソワ（ヴァンサン・ペレーズ）は、海外での仕事を忙しくこなしつつ、デルフィーヌとエルがそこまで親密になっていくのを心配したが・・・。

■□■2人の関係は？（1）まず“操縦”と“支配”を巡って■□■

夫婦関係における「亭主関白」は今や死語になっているそうだが、山田洋次監督の『妻よ薔薇のように 家族はつらいよⅢ』（18年）では、あえて平田家の夫、幸之助をそんな設定にした上で“妻の反乱”を面白く描いていた。日本では亭主関白とは逆に、夫がトコトンやり手の妻の操縦下にある夫婦も多く、それも夫婦円満の1つのパターンとされている。このように、夫婦関係における“操縦”と“支配”のあり方は微妙だが、“監禁”はさすがになく、「監禁モノ」は犯罪ミステリーものの1つのパターンになっている。しかして本作中盤では、まずその“操縦”と“支配”をテーマとするデルフィーヌとエルの人間関係が次々と展開されるので、それに注目！

いくら親しくても、他人同士が同居するのはプライバシーの観点から、やはり如何なもの？私はそう思うし、作家のデルフィーヌなら尚更そうだと思うのだが、エルからの同居

(居候?)の提案にデルフィーヌはあっさり同意。そして、エルの有能ぶりにかまけて(?)家のカギはもちろん、パソコンのパスワードまで教えた上、メールの返送から講演の替え玉までOKしたから、アレレ……。エルが進んでこれらの雑務(?)をこなすのは、デルフィーヌに新たな私小説の執筆に専念してもらいたいから、ということだが、それってホント?

このように、デルフィーヌがエルに対してすべてを許容したのは、エルが19歳の時に山岳ガイドの男と荒々しく愛し合ったことや、その男の自殺、そして父母に関する赤裸々な告白、さらには“キキ”という架空の友人の存在等を率直に話してくれたことの見返りだ。そして、そんなエルの告白に作家としての興味を覚醒されたデルフィーヌは、それをネタとして新たな私小説を書く意欲が湧いてきたから、不思議なもの。しかして、デルフィーヌは内緒でエルの話を録音したり、小説の構想をスマホに吹き込んだり、秘かに新たな行動を……。

このように、本作中盤における中年女2人が同居する中での互いの“操縦”と“支配”を巡る闘いは一見エルの方が優位だったが、そこからデルフィーヌの新作小説が誕生すれば、ひょっとして、勝者はデルフィーヌ……?一瞬、そんな錯覚も生まれかけたが……。

■□■ 2人の関係は? (2) 続いて“監禁”に! ■□■

本作の原作は、デルフィーヌ・ド・ヴィガンの『デルフィーヌの友情』。本作でデルフィーヌ役として出演しているポランスキー監督の妻、エマニュエル・セニエが、「この小説を読むべきよ。これは映画にできると思うわ」とポランスキー監督に語った(迫った?)ことによって本作が完成したらしい。しかして、その原作には“操縦”と“支配”の他“監禁”と“サスペンス”の要素が含まれているそう。しかし、前述したように夫婦関係には“監禁”はありえないし、デルフィーヌとエルの間にも“監禁”はありえないのでは……? そう思うのが当然だが、本作ではエレベーターのないアパルトメントの階段から転げ落ち、足を骨折したデルフィーヌがエルの提案に乗ってエルの田舎の別荘に行き、そこで執筆活動を始めることになる……。

多くの人は男でも女でもゴキブリやネズミが嫌いだが、別荘の地下室でネズミを発見した時のエルの驚き様と怖がり様は別格。そこで、翌日は大量の殺鼠剤の購入となったわけだが、「その散布はあなたの仕事よ」と言われ、松葉杖をつきながら地下室に降りていくデルフィーヌの姿を見ていると、何となくヤバそうな雰囲気……。しかして、その日エルが作ってくれた夕食を食べた後、デルフィーヌは体調を崩して何度も嘔吐した上、ベッドから起き上がることができなくなったから、その原因は?まさか、あの殺鼠剤がネズミ用だけではなく、デルフィーヌの食事の中にも……?いくら何でも、そんなバカ……。そう思いつつも、ここまでくれば、もはや2人の人間関係は“操縦”と“支配”ではなく、“監禁”状態に……。

他方、デルフィーヌから連絡がないことを心配したパートナーのフランソワから電話が入っても、エルは「デルフィーヌは食中毒で寝ている」と答えるだけ。さらに、夢うつつの中で机の上のメモを開くと、それが破られていたから、エルがデルフィーヌの創作活動にタッチしていることが明らかに。こりゃヤバい。こりゃ監禁だ。そう感じたデルフィーヌは遂に、ある夜、松葉杖をつきながら別荘を逃げ出したが、後ろから猛スピードで走ってきた車は・・・？

■□■2人の関係は？(3)最後は“サスペンス”に！■□■

近時、“紀州のドン・ファン”と呼ばれていた和歌山の資産家、野崎幸助さんの遺体から覚せい剤成分が検出されたことによって、こりゃひょっとして“後妻業”に絡んだ殺人事件？そんなサスペンス模様が週刊誌的興味を集めている。しかして、本作でも道路上に倒れていたデルフィーヌの体内から殺鼠剤に含まれる硫酸タリウムが検出されたことから、俄然サスペンス調に！

やっとなんか助かった！これでエルの監禁から逃れ、殺鼠剤による殺人からも解放された！デルフィーヌはそうフランソワに訴えたが、フランソワの反応は？デルフィーヌはフランソワからエルに入った電話をたしかに聞いたと主張したが、フランソワはエルに電話したものの繋がらず、エルとは話していないらしい。こりゃ一体どうなってるの・・・？“紀州のドン・ファン”を巡る警察の対応は「基礎捜査の段階だ。事件性があるかどうかを見極めている」そうだが、それと比べてもデルフィーヌの訴えが根拠不十分なのは明らかだ。さらに、今エルは一体どこにいるの？

他方、元気になったデルフィーヌに対して、出版社は「今度の新しい小説はすばらしい」と絶賛してくれたが、一体誰が私の名で小説を発表したの？出版社はデルフィーヌのそんな困惑ぶりには目もくれず、サイン会の準備をし、今日は本作冒頭と同じようなサイン会の日だ。冒頭と同じように、そこには多くのファンが列をなして新作本へのサインを求めているが、そこにエルの姿は・・・？

あなたはこのサスペンスをどう解釈？ひょっとして、そもそもエルなど存在しなかったの？これらは全てデルフィーヌの妄想の中で作り出された物語なの？エルの話によく出ていた“キキ”のことを考えると、ひょっとして、それもあり？そう思わないでもないが、さて真相は？『告白小説、その結末』という邦題にもかかわらず、その結末が？？？となるところがポランスキー監督らしいところだ。なるほど、なるほど・・・。

■□■両監督の「エル」比べも一興かも？■□■

ちなみに、本作の「エル」を見て、私はフランス人女優イザベル・ユペールが主演した『エル ELLE』(16年)を思い出した。同作は、『氷の微笑』(92年)のポール・ヴァーホーヴェン監督作品で、ヒロイン、エルのレイプ事件をテーマとした面白い映画だった(『シ

ネマ 40』31 頁) が、本作とは全く無関係。しかし、そんな『エル ELLE』の「エル」と、本作の「エル」を比べてみるのも一興かも・・・。

2018 (平成30) 年7月6日記